

ウミガメに「夏」、クジラに「冬」を感じる

海は、狩猟採集、交通、祭事・年中行事、信仰、遊びなど、奄美群島の人々にとって生活の一部です。魚や貝類、イセエビ、タコ、イカなどの漁獲時期や、サンゴの産卵、ウミガメやクジラの繁殖など、海の生きものたちの行動は季節を感じさせる身近なものとして捉えられてきました。

ウミガメ類

奄美群島には、日本近海に生息しているウミガメ類のうち、主にアオウミガメとアカウミガメが産卵にやってきます。それ以外にも、奄美大島では稀にタイマイが産卵し、過去には国内唯一のオサガメの産卵記録もあります。

アオウミガメ、アカウミガメの産卵時期は5～7月です。アオウミガメは繁殖期以外も奄美群島の沿岸にいますが、アカウミガメは繁殖期にならないと奄美群島の沿岸にやけません。アオウミガメの産卵地は熱帯海域に広く点在しており、日本国内では主に小笠原諸島及び屋久島・種子島以南の南西諸島です。アカウミガメの産卵地は北太平洋では日本だけです。

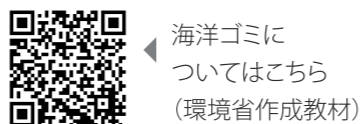
ウミガメは産卵から約2か月後に孵化し、約1週間をかけて砂の中から地上へ脱出し、海へ旅立っていきます。アオウミガメの子ガメの生活はまだわかっていませんが、アカウミガメの子ガメは海流に乗り、アメリカのカリフォルニア沖まで行きます。カリフォルニア沖でたくさんのエサを食べて成長し、また海流に乗って旅をして、推定16～17歳以降に産卵地である日本周辺に再び現れることが分かっています。アオウミガメもアカウミガメも性成熟するには30年前後あるいはそれ以上かかると推定されています。

近年、アオウミガメの個体数が世界的に増加傾向とされており、その原因としては、人がウミガメを食べたり剥製にしたりする文化がなくなったこと、漁業被害の防止のためにサメの駆除が行われておりウミガメの天敵が減ったこと、沿岸漁業の衰退によりウミガメの混獲が少なくなったことなどが挙げられています。

一方で、アカウミガメの個体数は減少傾向とされており、その原因としては、産卵に適した暗い砂浜の減少、漁業による混獲、甲羅などを目的とした密猟、漂流している海洋ごみの誤飲などが挙げられています。

アカウミガメの回遊ルートは、海洋ごみの集まりやすい海域(太平洋ごみベルト)と重なっています。捨てられた漁網などに生きものが絡まって衰弱死したり、漂流するプラスチックを誤飲して臓器が傷ついたり海中の有害物質と一緒に取り込んでしまったりと、ウミガメ類以外の海鳥類や魚類なども含め多くの生きものへの海洋ごみによる悪影響が危惧されています。

海洋ごみの70%は陸から海に流れ出たものです。なかでもプラスチックごみの多くは、ポイ捨てや野外に放置されたものが、雨や風によって川に流れて海に至ったもので、その発生源は陸です。日常で意識することは少ないですが、私たちの生活は、海に生息する生きものたちともつながっています。海岸を掃除するといった直接的な取り組みだけでなく、プラスチックごみを減らし、きちんと分別して捨てることも、海の豊かさを守る取り組みと言えます。



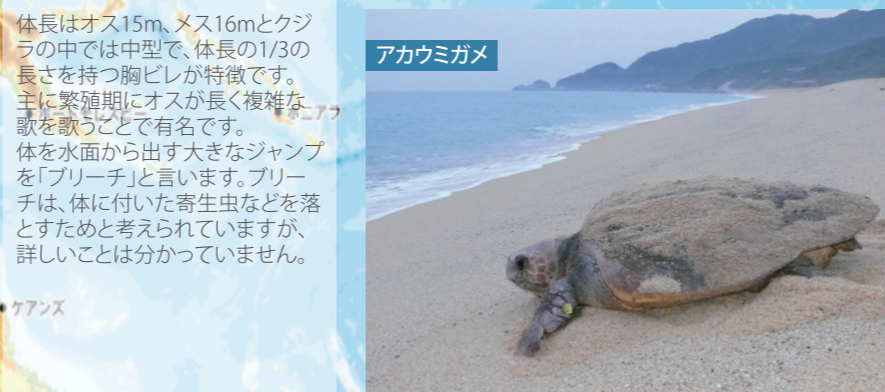
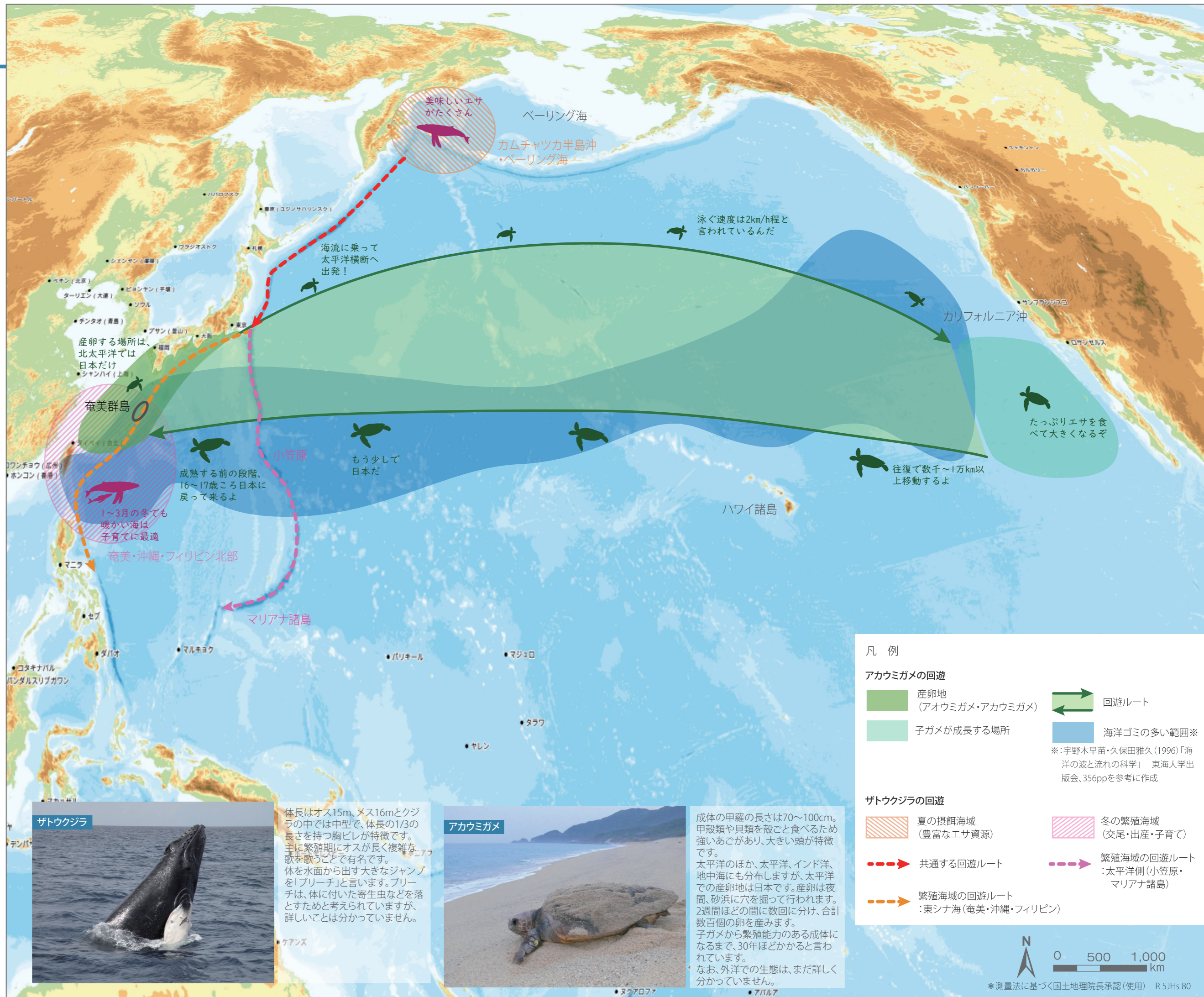
ザトウクジラ

奄美群島の近海には、冬の間多くのザトウクジラが訪れます。

ザトウクジラは季節ごとに移動しながら生活しています。夏の間はエサが豊富に食べられるカムチャツカ半島沖やベーリング海峽など冷たい海まで北上します。そして冬になると交尾や出産、子育てのために奄美・沖縄・フィリピン北部の暖かい海に南下してきます。奄美には1～3月ごろにザトウクジラが集団でやってきます。近年の研究では、奄美、沖縄、小笠原、北海道の国内4海域が、ザトウクジラの1つの共通の集団によって利用(交流)されており、さらにその集団内にはフィリピン海の太平洋側(小笠原からマリアナ諸島)と東シナ海側(奄美、沖縄、フィリピン)をより頻繁に利用する2つの小グループが存在する可能性が示唆されています。

かつて奄美群島では、捕鯨が盛んに行われていた時期がありました。最近では、クジラを船から観察しようとするホエールウォッチングツアーに人気が出始めています。また、船からだけでなく、陸からもクジラを観察できるポイントがいくつもあります。奄美大島のあやまる岬や宮古崎、ホノホシ海岸、徳之島のクジラ岬、クジラ坂展望台、金見崎展望台など、冬の間、奄美群島のどこでも運が良ければクジラが海面から潮を噴き上げる様子を観察することができます。

- [出典] ・ウミガメ 「わきゃあまみ15 アオウミガメとアカウミガメ」(制作:奄美自然体験活動推進協議会・環境省奄美野生生物保護センター)
「ウミガメ保護ハンドブック」(制作:環境省自然環境局、日本ウミガメ協議会)
・ザトウクジラ 「わきゃあまみ14 奄美群島のクジラとイルカ」(制作:奄美自然体験活動推進協議会・環境省奄美野生生物保護センター)
プレスリリース「国内4海域に來遊するザトウクジラの集団構造を解明!3,532頭分の写真を相互に照合」(一般社団法人 沖縄美ら島財団)
・海洋ゴミ 海洋ごみ教材(環境省)
・背景図 地理院タイル(標準地図)



体長はオス15m、メス16mとクジラの中では中型で、体長の1/3の長さを持つ胸ビレが特徴です。主に繁殖期にオスが長く複雑な歌を歌うことで有名です。体を水面から出す大きなジャンプを「ブリーチ」と言います。ブリーチは、体に付いた寄生虫などを落とすためと考えられていますが、詳しいことは分かっていません。

成体の甲羅の長さは70～100cm。甲殻類や貝類を殻ごと食べるため強いあごがあり、大きい頭が特徴です。太平洋のほか、太平洋、インド洋、地中海にも分布しますが、太平洋での産卵地は日本です。産卵は夜間、砂浜に穴を掘って行われます。2週間ほどの間に数回に分け、合計数百個の卵を産みます。子ガメから繁殖能力のある成体になるまで、30年ほどかかると言われています。なお、外洋での生態は、まだ詳しく分かっていません。

凡例

アカウミガメの回遊

- 産卵地(アオウミガメ・アカウミガメ)
- 子ガメが成長する場所
- 回遊ルート
- 海洋ゴミの多い範囲※

※:宇野木早苗・久保田雅久(1996)「海洋の波と流れの科学」東海大学出版会、356ppを参考に作成

ザトウクジラの回遊

- 夏の摂餌海域(豊富なエサ資源)
- 冬の繁殖海域(交尾・出産・子育て)
- 共通する回遊ルート
- 繁殖海域の回遊ルート:太平洋側(小笠原・マリアナ諸島)
- 繁殖海域の回遊ルート:東シナ海(奄美・沖縄・フィリピン)

